テノーシャの村娘

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テノーシャの村娘

【Ｎコード】
Ｎ２０７１Ｎ

【作者名】
ねむこ

【あらすじ】
異世界にトリップして特に何事も無く平穏に暮らしていたある日、王都から使者がやってきた。冷酷無比な王様が治める国テノーシャで出会った異世界産村娘と、ある男のいちゃらぶ物語。　（９／１８　少し変更しました）　※不定期更新です※

村娘になりました

半年前、あたしはこの世界にやってきた。
冷酷無比な王様が治めるテノーシャという国に。
王様の冷酷無比ぶりはとても有名らしく、あたしの暮らす村にも噂は聞こえてたけどいくら王様が冷酷無比でもあたしとの接点は欠片もなかった。

あたしはこの村から出たことがない。

明け方、ぽつんと村の広場にいた右も左もわからないあたしを温かく迎え入れてくれた村の人たち。
たまにあるんだよ、と言って村のはずれにある空き家を貸してくれたし、ご飯もわけてくれた。
仲の良い友達もできた中、半年も経てばこの村で生活するのに支障がないくらいには慣れることができた。
今では裏の畑に野菜もたくさん実ってる。
卵とミルクもわけてもらえるし、お礼に農作業を手伝ったり小さな子たちの遊び相手をしたりしてた。

そんなときだった。

王都から使いの人が来たのは――

「王があなたを十八番目の側妃にと望んでおいでだ。」

少し考えて、扉を閉めた。

十八番ってあーた。
いくらなんでもそれはないわぁ。

しっかりと鍵をかけた扉を外から叩く音が聞こえたけど、あたしは帽子をかぶると畑へと続く扉から外へ出た。
初夏のように輝く太陽に手を翳す。
そろそろ水撒きの時間だ。
かめに溜めてある水を手際よく撒くと焦げ茶色の土が水を吸ってさらに濃い色になる。
しばらく撒いていると額に汗を感じてぐいっと袖で汗を拭った。
水を撒き終わって収穫できそうな野菜を見て回り、いくつか目星をつける。
それらを夕飯前に収穫しようと決めて家の中に戻った。

玄関の扉は静かだった。

もう帰った？そう思って窓から外を見ると男が玄関前で倒れていた。
たしかに今日は少し暑いけど、まさか倒れるとは。
しかもひとん家の前で。
はた迷惑な男をそのまま日干しにするのも気が引けて、影に入れてやろうと外開きの扉を開けた。

当然、イイ音がした。

居着かれました

使いの男は王都に帰らなかった。

頭のたんこぶを介抱したのがいけなかったのか、あれから三日、男はあたしの家に居座っている。きっと、あなたを連れて行かないと自分も帰れないとか言い出す気だ。

ちっちっち、それは困るのだよワトソン君。

王様がどうしてあたしのことを知ってるのかは不思議だけど、十八番目の側妃ということはその上に正妃さまがいるはずだから実のところは十九番目。

顔も知らない冷酷無比男の十九番目の奥さんなんて愛も無くて誰がなりたいと思うのよ？地位とかお金とか？それに後宮といえば愛憎が渦巻いてて派閥とかあってドロッドロでイジメとかすごいんだから。

そんなのあたしはお断りだ。

ふん、と意気込み洗濯物を畳む作業を再開する。

背中にはこちらを窺う男の視線をずーっと感じてた。

逃げやしないってば。

あたしにはここしかないんだから。

それにしてもあまりにも視線があからさますぎる。

本人は気づかれてないつもりか、気づかれてもかまわないと思っているのか。

ぱっと振り返ると男がさっと顔を逸らす。
・・・え、これはまさか、本気で気づかれてないと思ってる？

このあと何度か繰り返して確信した。
なんて不器用な男だ。

洗濯物を畳み終えて棚に入れていると、持ち方が悪かったのか最後の一枚がひらりと落ちる。
目で追えばそれは白い下着だった。
床に落ちたんじゃなくて良かった、そう思ってイスから拾い上げて目の前で広げる。
うん、どこも汚れてない。
畳んで下着用の引き出しに入れ、ふと顔を上げて気がついた。

凍りついたように微動だにしない男に。

そこはせめて見ないふりをしてほしかったよ。
まぁ洗濯した後のでよかったけど。

洗濯前だった場合は・・・

一瞬で熱くなった顔のまま、慌てて回れ右して裏庭へ駆け込んだ。
大きくため息を吐くと、気分転換もかねて畑に水を撒いていく。
しばらくすると夕方でもまだ少し暑くて、ワンピースが張り付いてきた。
じとっとした感触にすぐにでも水浴びに行ってさっぱりしたくなった。

水撒きを終え、着替えとタオルを持って村の裏手にある湖に向かう。
村のみんなはこれから夕食の時間だから誰もいないよね、と軽くあたりを見回して、湖の縁にいくつかある岩の上に着替えを置く。
この村にお風呂という習慣がないので、湖での水浴びはあたしにとってほぼ日課だった。
誰もいないのを確認すると、靴と靴下を脱いでから服を脱ぎ始める。
前に一度だけ服を着たまま湖に入ったことがあるけど、そのとき帰ってから脱ぐのに苦労したせいで服を着たまま入らないという教訓を得たのだ。

慣れた動作で綿１００％のワンピースとブラがわりのハーフトップとパンツを脱ぐと、汗を吸って重くなってる３枚を持って湖に入る。
底まで見通せるくらい透き通った湖の少し深いところまで入ると、それらを濯ぐように上下に動かした。
ちゃんと洗うのは明日になるけど、これで今晩は臭くない。
軽く絞ってから広げると近くの岩の上に並べておく。

もう一度湖に入って今度は体を水洗いする。
最後に頭まで潜るとぷはっと水面に顔を出した。

ええ、びっくりしましたとも。

そこに熊がいれば。

名乗りました

少し離れたところにいるそれは、よく見れば熊ではなく熊ほどの大きさをした狼だった。
今まで直にお目にかかったことはなかったけど犬より鋭いあの目つきは狼だ。たぶん。・・・大きいけど。

対して、夕闇迫る景色の中で男が一振りの剣を手にしていた。
頭だけ水から出した状態で観察していてふと思う。
あの男はどうしてここに？
散歩していたら狼と出くわして戦闘が始まっちゃったとか？
でもできるならもう少し離れた場所でやってほしかった。
そこは着替えに近すぎる。さっき広げたワンピースその他2点にもだ。
それにあんまり長くここにいると体が冷えるんですけど。
ぶくぶくぶくと、鼻の下まで浸かって口から息を吐く。
音を湖のさざなみにかき消されながら、じとーっと男の背中を見つめた。

ふいに男が動いた。

夕暮れの残滓を纏った剣先が一閃する。
まるで金属同士が擦れたような音をたてて狼の爪がそれを受け止めた。
なんてこったい。
わんちゃんの爪はメタリックな代物だったのか。さすが異世界。

狼の前足には異様な長さをした黒い爪が見えた。
ぎりぎりと圧し合っていた一人と一匹が同時に後方に跳ぶ。
再び睨み合う両者。
でもあたしにはそれどころじゃなかった。
火花が散りそうな緊迫した空気よりも、その横の着替えが気になる。
あれはやばい。次に男が勢いよく地面を蹴れば確実に土がかかる距離だ。
はらはらしながら戦いの行方を見守る。
じり、じり、とお互いを見ながら円を描くように少しずつ移動して男がさらに着替えに近づく。

待って！待て待て待て待て！

何かないか、何か・・・焦る心であたりを見回してあるものを見つけた。
それを湖の底から拾うと腕を振り上げ、狼の頭上に向かって投げつける。
見事、狼はそれをキャッチした。
ぱくん、と見事に空中でキャッチしたそれは動物の骨だった。
よくイラストで見るような形をした骨をくわえたまま、狼が頭を出しただけのあたしを見て男を見る。
しばらく男と見つめ合っていた狼がくるりと向きを変えると、悠然と森の奥へ帰って行った。
その背中が見えなくなるまで見送ってから男が剣を鞘におさめてゆっくりと振り返り、

・・・不自然な体勢で硬直した。

気まずさを抱えながら家に帰ると、先に戻っていた男がミルクを温めて待っていた。
火をつけるのに悪戦苦闘したらしい痕跡を見ないようにしてイスに座ると、男がミルクをコップに注いで差し出してくる。
それを受け取り一口飲むと、冷えた体に温かいミルクがじんわりしみていくのを感じて、ほうっと息をついた。

「先ほどはすまなかった。」

そう言って、ましにはなったもののまだ少し赤い顔を下げた男を見る。
いかに透き通った水でも沈む夕日が反射して丸見えではなかったと信じたい。

「いいえ・・・こちらこそ助けていただいたようで、ありがとうございました。」

立ち上がり頭を下げてお礼を言うと、二人とも頭を下げた状態で目が合った。
三日もあってしっかり目が合ったのはこれが初めてで、そのことにちょっと可笑しくなってプッと吹き出すと男も微かに笑ったようだった。

「あたしは七実（ななみ）　七宮（ななみや）。」

三日もしてからの自己紹介なんて変な気分だ。
たんこぶの介抱をしてたときは打ち所が悪かったのか男はぼんやり

してたし、それ以降はいつも離れたところから視線をよこすだけ。
一日の9割以上無言で、声を聞いたのはご飯を出したときだけだった。
食べた後は勝手に片付けてくれるからつきっきりでなくて済んだし。
やっぱりこの三日で自己紹介をする気も機会もなかったと思い直す。

「ナーミナーミャ？」

うん、こうなるよね。村のみんなもこうだったから。

「ノンノン、ワトソン君。な・な・み。な・な・み・な・な・み・や。」

さあどうぞ？耳に左手をあて、ちっちと右の人差し指を手前に振って促す。

「ナ・ナ・ミ・ナー・ミ・ア。」

少し戸惑ったような男が素直に繰り返した。
惜しい。惜しいけど仕方ない。ななみが言えただけでも良しとする。
頷いてから思い出した。この男はあたしを勧誘しにきた男だったことを。
仲良くなってどーすんの。
この男がちゃんと言えても言えなくても関係ないじゃない・・・

「私はレ・・・スウェーネ＝ミレオ。」

言い間違えたらしく、その表情は照れているようだった。
胡桃色の髪は柔らかそうに緩いカーブを描き、蜂蜜色の目は見ようによっては金色にも見える。

胡桃と蜂蜜という実に美味しそうな色を組み合わせた男は見た感じ２０代前半くらいで、王都からの使者なだけあってどこか気品を漂わせている。
着てるものも生地からして良さそうなものだった。
質素に見えて実は凝ったつくりの暗い青を基調とした上下に、さらに濃い色のマントを斜めにかけている。
アクセントに白と金が入った衣装は彼にとても似合っていた。

出掛けました

あれから二日。
側妃のことも口にせずに、エーネはこの村に馴染んでいた。

「それ取って。」
「ん。」

ちらっと振り返って目で合図したら、ちゃんと理解して必要な調味料を取ってくれる。
それを受け取ってパッパッと鍋に振り入れ、ん、と返すと当然のようにそれを元のところに戻してくれた。
なんかツーカーの夫婦になったみたいでくすぐったい。
でもエーネはただの使者なんだよね。
今のところ、あなたを連れて行かないと自分も帰れないとかは言い出してこないけど、どういうつもりなんだろう？
ズボンもシャツも綿１００％の村の青年風な格好になったエーネをそっと見る。
食器棚からお皿を取り出しているエーネは背筋がぴんと伸びて姿勢が良い。
人当たりも良くてすぐに村にも溶け込んだし、畑仕事もイヤな顔一つせずに手伝ってくれる。
うーん、と考えながら鍋をぐるぐるかき回して、少し小皿に取って味見した。

「うん、今回もばっちり。」

おたまを持ったまま振り返ると、エーネがコップも出していた。
よく気が利く人だと素直に感心できる。
でも手つきがちょっとぎこちなくて、家でもやったことがなさそうなのは感じてた。
服装といい空気といい、もしかしなくても良いトコのお坊ちゃまなんじゃないの？
お皿に盛りつけたスープと少しパサついたパンを前に、じとーっとエーネを見つめる。
コップにミルクを注いでいたエーネが気づいて、不思議そうな顔で見返してきた。

「エーネって、」

いつまでいるの？そう聞こうとして口ごもる。
それを聞いたら終わりな気がして別のことを口にした。

「明後日の収穫祭、楽しみだね。」

ここに来て初めてのお祭りなんだーって笑いながら言うと、エーネも笑って頷いた。

「そうだね、どんなことをするんだろう？」
「クッキーとかサンドウィッチとか食べられるってルテおばさんが言ってたよ。」
「あーあ、ナーナは食べ物ばっかりだ。」

クスッと笑って、エーネがミルクの入ったコップをあたしのとこと自分のとこに置くと、二人で揃っていただきますを言ってからスプーンを手に取った。

収穫祭の日がきて、今日が一番のオシャレ時だととっておきのワンピースを身につけた。
少し前にアミャおばさんに貰った、白地に赤いボタンが裾まで続いている前開きのワンピース。
娘さんがもう着ないからってくれたけど、ふんわりした袖にアンダーバストを赤い紐で絞っていてとっても可愛い。
ワンピースに合わせて白いリボンで髪を一部だけ纏めて部屋を出る。
部屋の外で待っていたエーネは、紺色の細身のズボンに白いシャツで、綿１００％なのにいつもより格好良い。

「エーネってば王子様みたい！」

くふふ、と笑って言うと、ちょっと戸惑ったようなエーネも少し赤くなって微笑んだ。

「・・・ナーナもお姫様みたいで可愛いよ？」

エーネの思いがけない反撃に、そんなことを言われたことのない頭が一瞬止まって心臓が異常なくらい大きく脈打つ。
顔が熱くなって肺のあたりがきゅうっとなると、本気で倒れるかと思った。

広場までの道をエーネと並んでゆっくり歩く。
お世辞だとわかっていても少し照れくさくて、何を喋ろうか迷ってる間に言葉がなくてもいいような気がしてきた。

エーネはどう思ってるのかな？とちらっと隣を見れば、ほぼ同時にエーネもこっちを見てきて思いがけず目が合った。
それはただの偶然ぽかったけど、何だか嬉しいような恥ずかしいような変な気分で慌てて逸らしてしまってちょっと後悔した。

村の収穫祭は飾りつけを手伝ったときに思ったよりも大きかった。
道沿いの柵には可愛い花と蔓で編んだリースがついてるし、広場にはくるんくるんに巻いたリボンやたくさんの飾りがついていた。
その下で屋台のように木の机を並べて、お菓子やジュース、それにサンドウィッチやお酒など色んなメニューが並んでる。
出会うみんなと挨拶や世間話をしながら、全種類制覇に向け一つずつ完食していたあたしの手をエーネがそっと止めた。

「どうしたの？」
「これはナーナにはまだ早いんじゃないかな？」

エーネがこれと言ったのは可愛いピンク色をした果実酒だった。
ふっ、残念ねワトソン君。あたしはすでにこの世界では成人しているの。
たしかに、１７で成人というこの世界に来たときは１６だったけどね？
あたしはエーネに勝ち誇った笑みを向けた。

「エーネ、あたしの年齢いくつだと思う？１７よ、１７。ここではお酒を飲んでも良い年齢なの。」

だからあたしは飲む！そう意思表示するつもりでお酒の入ったコップを手に取り、エーネに乾杯をするように掲げる。

コップに口をつけても、エーネはもう止めなかった。

自覚しました

ふわふわしてとっても気分が良かったお祭りの日。
収穫祭の締めにダンスがあって、あたしは上機嫌でエーネと踊った。
ダンスを踊ったことなんて全然なかったけど、エーネのリードが上手くて体が勝手に動いてたような気がする。
すっごく気分が良くて、エーネを見上げてへらへら笑ってた記憶で・・・終わってる。

どういうこと？
どうしてこんなことに？
なんでエーネが隣に寝ているの？
なんでエーネのシャツの前が開いてるの？
あ。暑かったから？そうよね？それだけだよね？
硬いベッドの上、日の光を浴びて眠っているエーネをちらりと見てから慌てて逸らす。
はだけたエーネの胸を見ないようにしながら、ベッドから下りようと静かに起き上がり、んなーっ！？
咄嗟に悲鳴を飲み込み思いっきり服の前をかき合わせた。
何このかっこ！
えーっ！なんであたしまでー！？
起きてもないエーネに背中を向けて、胸元まで開いたワンピースのボタンをせっせと留めていく。
細かいボタンと、焦ったせいで指が震えて少し手間取ったけど何と

か留め終わり、そっと隣を見るとエーネはまだ眠っていた。
そのままエーネを起こさないように気をつけながら、ふらふらする足と心で部屋を抜け出した。

自分の部屋に入って扉を閉めると、ちらっと襟ぐりから中を覗いてずるずるとその場にしゃがみ込んだ。
良かった。噂の“虫刺されのようなもの”がなくて。
はあーっとため息を吐くと、足を抱えて目を瞑る。
・・・うーん、思い出せそうで思い出せない。
ダンスの後、誰かにおんぶされてた・・・ような、気も、する。
うわぁ、でもこれを確認するのはちょっと・・・
真相を知ってるのがエーネだけだとしても、無理だ。気まずすぎる。
だってせっかく注意してくれたエーネにあんなこと言っといて、最後は酔っ払って倒れたってことでしょ？
・・・最悪だ。
うーんうーんと唸っていると、控えめな足音が聞こえてきて後ろで止まった。

「・・・ナーナ？」

一瞬、扉越しのエーネの声に何か思い出しそうで、両方のこめかみを押さえる。

最近じゃない・・・

ここへ来る前に、どこかで・・・

とても大切なことを・・・

『・・・必ず・・・』
「っ！」

はっと目を開いたとたん、ずきっとした痛みがあって思い出しかけた何かはあっさりと消えてしまった。
鈍い痛みもすぐに治まっていく。

「ナーナ？」

そのまま頭を押さえて蹲っていると、エーネがもう一度、今度は扉の近くに口を寄せたようにごく間近で呼びかけてきた。
その心配そうな声に少しだけどきっとする。

「うん、大丈夫。なんでもないよ？」
「・・・・開けても？」

あ、それはちょっと待って！
今開けられると押されて転がるから！

「ごっ、ごめん！今はちょっとその・・・」
「ぇ、あ、ち、　違う！あれは誤解だ！苦しそうにしてたから緩めただけで！」

どこか必死そうなエーネに首を傾げてすぐに思いあたった。

「あー、それならうん。エーネが何もしないことくらいわかってるから。安心して？」

少し笑って言った自分の言葉に、ぎゅっと苦しくなった。

・・・エーネはただの使者なのに。

王様の命令でやって来ただけで、あたしと何かあったりするはずないのに。

それがどうして、こんなに、寂しいんだろう・・・？

・・・・・・え？

・・・あ、あ、あ・・・あーっ！

こ、こ、こ、これって来い、じゃなくて濃い、でもなくて恋なんじゃ！？

あたし、エーネのこと・・・好きなんだーっ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2071n/

テノーシャの村娘

2010年12月4日20時58分発行